

# 情報伝達手段不足

市は、「正確で有益な情報をどのように迅速に広く伝えるか」という難題にぶち当たった。市役所や避難所への掲示、広報車、自治会長を通じての回覧などで周知を図ったが、めまぐるしく変化する情報に対応することは困難を極めた。それでもライフラインが復旧すると、市のホームページに災害関連情報を掲載し、しろいし安心メールでも情報を流した。ホームページへのアクセス件数は通常の3倍、安心メールの登録件数は地震から1カ月で約20%増えた。テレビや新聞などの報道機関も活用し、持てる情報を発信した。ただ、それでも十分ではなかった。情報は安心を与えるための大きな手段になる。伝達手段をいかに確保し、必要な情報は何かということをもう一度整理する必要がある。



▲ホームページや安心メール、市役所前への掲示での周知

# 余震で被害が拡大、復興の足かせに



▲仙南仙塩広域水道の本管が再びはずれ断水した

断続的に続く余震は、被害をさらに広げ復興への足かせとなっている。4月7日午後11時32分ごろに発生した地震では、白石で震度5弱を観測。この地震により水道管が破損し、寿山や緑が丘、郡山、白川など約300世帯が再び断水した。また、ホワイトキューブのガラス壁が落下したり、道路や建物の亀裂が広がったりするなど被害が拡大した。しかし、被害以上に心配されるのは目に見えない「人々の心」である。緊急地震速報が鳴るたびに、「またあの地震が来るのか？」という不安に悩まされる。そうした日々が続けば、復興に向けて動こうとしている人々の心を折れかねない。長期戦を覚悟しなければならぬことを、再度、心にとどめておく必要がある。

# つ のる不安・不満

地震から一夜明けた3月12日以降、食品、生活用品、ガソリン、灯油を手に入れようと各地のスーパーやコンビニ、ガソリンスタンドなどに大勢の人が詰め掛けた。ライフラインを奪われ、移動手段のためのガソリン調達もままならない、欲しい情報がなかなか手に入らない、放射線という見えない敵、いつ起こるか分からない余震。いくつもの「想定外」が重なった今回の大地震。不安や不満を挙げればきりがないだろう。しかし、このような状況の中、自分の家のことを後回しにして活動した消防団や自主防災組織、ボランティアの方々がいた。隣近所の高齢者のために水や食料を調達した方がいた。「想定外」に立ち向かうためにみんなが動いたのだ。



▲食料や生活用品を買い求めにスーパーなどには長蛇の列

# ライフライン寸断

今回の地震は、あらゆるライフラインを寸断した。電気・電話は市内全域、水道も約6割の世帯で断水となった。そして、断続的に襲う余震の恐怖から逃れようと、人々は避難所へと向かった。しかし、停電の中での避難所開設は、食料や毛布などの備蓄用品を適正に配分するための避難者数把握を困難にした。さらに、電話が通じないことで本部と避難所、被害個所との迅速な連絡を取ることができなかつた。「想定外」の出来事を前に、便利な生活に慣れた私たちは、冬に逆戻りしたような寒さと先の見えない不安と闘う日々が続いた。文字通り「命綱」を断られた状態となった。



▲信号機も含め市内全域のあらゆる電気がストップ

# 燃料不足で物流・経済がストップ



▲ガソリンスタンドには開店前夜から長蛇の列が

今回の災害の大きな問題の一つに、ガソリンや灯油、軽油などの燃料不足がある。道路が寸断されたことと、太平洋側の港湾施設が津波で損壊したことが大きい理由とされている。市は再三、燃料の供給を強く要請してきたが、2週間を過ぎてもガソリンスタンドなどの渋滞がとぎれることはなかった。災害復旧車両を優先させた事情もあるが、緊急車両を優先させなければ復旧ができない。しかし、一般車両に行き渡らなければ経済が回らない、物流が回らないというジレンマに陥った。ガソリンスタンドや市役所などには苦情が相次いだ。このことは、今後の災害計画を見直す上で重く受け止めなければならない。

# 福島原子力発電所問題

白石でライフラインの復旧に全力を挙げているころ、見えない恐怖が白石にも降りかかろうとしていた。今回の地震と津波により、福島県大熊町・双葉町に立地している東京電力福島第一原子力発電所が損壊し、放射性物質が放出。福島県の一部地域では農産物や水道水からも基準値を超える数値が検出され、出荷制限や摂取制限が出された。市では、宮城県が管理する仙南仙塩広域水道「南部山浄水場」の調査を要請。原乳や土壌についても調査を行い、放射性ヨウ素・放射性セシウムともに指標値を下回っていることを確認した。しかし、依然として予断を許さない状況が続いていることから、市としてもできる限りのことをしていかなければならない。



▲私たちの大切な水道水が危険にさらされた

次々と襲った

「想定外」